

令和元年6月10日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03759

研究課題名(和文) 会計基準のリスク志向性モデルの構築：設定主体のリスク志向性に関する実証的研究

研究課題名(英文) Construction of the risk orientation model of accounting standards: an empirical study about the risk orientation of Accounting Standards Setters

研究代表者

久保 淳司 (Kubo, Junji)

北海道大学・経済学研究院・准教授

研究者番号：70322790

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：会計基準上、将来支出に関する会計処理はSFAS5型とSFAS143型の2種類に分けられる。前者は受動的なリスクに適合的な会計処理であり、後者は能動的なリスクに適合的な会計処理である。また、前者は伝統的な保守主義会計の系譜に連なる会計処理であるのに対して、後者は今日的な保守主義会計の萌芽に位置づけられる会計処理である。

ASBJ, FASB, IASBの各会計基準の内容を分析したところ、ASBJとFASBはリスク回避の姿勢が強く、SFAS5型の会計処理を保持し続けることが予想されるのに対して、IASBはリスク中立的であり、近い将来にSFAS5型の会計処理を捨て去ることが予想される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、会計基準設定主体のリスク志向性に着目し、会計基準設定過程への影響という具体的な局面に適用する。各会計基準設定主体は明文化した概念フレームワークとは別に、暗黙裡に培った黙示の概念フレームワークを保有していると考えられ、本研究によって、この黙示の概念フレームワークの一端を浮き彫りにできた。

資産・負債概念の基礎理論の深化への貢献、貸借対照表理論の深化への貢献といった会計理論の深化だけでなく、資産・負債の定義、認識、測定に関わる議論の詳細な検討、J-GAAP, US-GAAP, IFRSs各基準の特徴の明確化など会計基準の改善に資することが期待される。

研究成果の概要(英文)：In this research, I found the following:

- (1) Accounting procedures about future expenditures are divided into two types: SFAS5 and SFAS143. The former matches accounting procedures with an involuntary risk, and the latter matches them with a voluntary risk. Further, SFAS5 is one variation of a traditional conservatism accounting, while SFAS143 type is an application of a contemporary conservatism accounting, and
- (2) ASBJ and FASB are risk averse and are expected to maintain SFAS5, while IASB is risk neutral and is expected to abandon the SFAS5 type in the near future.

研究分野：財務会計論

キーワード：SFAS5型 SFAS143型 リスク 将来支出

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国際的な会計基準のコンバージェンス作業が続いている。コンバージェンス作業は当初は順調に進んでいたが、最近の作業ではコンバージェンスの困難さが浮き彫りになっている。作業の進行につれて、各会計基準設定主体の「譲れない線」に近づいているようである。この譲れない線は、法制度、政治体制、経済・金融システムなどさまざまな要因で決まることが内外の研究で示されているが、本研究では会計基準設定主体のリスク志向性という独自の観点を設定する。

個人や組織の行動は、リスク回避的であるかリスク選好的であるかによって大きく異なる(保険に入るか入らないか、貯金か投資か、新規投資に保守的か積極的かなど)。さらには、同じ不確実な事象に対しても、それを危険と捉えるかチャンス(機会)と捉えるかという知覚の相違にも結び付く。リスクに対する志向性(知覚・認知・行動・好みなどの総称)が行動や知覚に重要な影響を及ぼすため、会計基準の内容には会計基準設定主体のリスク志向性が反映されると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、会計基準設定主体のリスク志向性が会計基準に及ぼす影響を「会計基準のリスク志向性モデル」として構築することを目的とする。具体的には、会計基準設定主体のリスク志向性が設定過程を通じて会計基準の内容に影響を及ぼすという仮説の下で、(1) ASBJ(Accounting Standards Board of Japan ,日本),FASB(Financial Accounting Standards Board ,アメリカ), IASB (International Accounting Standards Board ,国際会計基準)の各会計基準設定主体のリスク志向性の検証,(2)会計基準設定主体のリスク志向性と会計基準の内容との間の因果プロセスの明示化,(3) 会計基準設定主体のリスク志向性を形成する決定要因の探索によって、会計基準のリスク志向性モデルを構築することを目的とする。また、このモデルの適用を通じた国際的な会計基準のコンバージェンス作業をはじめとする会計基準設定過程の透明性および効率性の向上の手法を提示する。

3. 研究の方法

本研究では、以下の内容を4年間で実施する。(1) リスクに関する会計基準の客観的な規準に基づく網羅的な抽出,(2) リスク概念に関する他分野の知見のサーベイ,(3) 議事録,コメントレーター,公開草案などを用いた,リスクに関する会計基準の設定過程に遡った詳細な分析,(4) パイロットテストを含む,本研究の目的に適合する内容分析手法の探求,(5) リスクに関する会計基準に対する表示場所,投資の性格,財務諸表の構成要素などを主題とする内容分析の実施,(6) 会計基準設定主体のリスク志向性を決定する歴史や環境の要因の分析,そして,(7) これら(1)から(6)の知見を統合する。

4. 研究成果

(1) 1年目には,FASB のリスク志向性の把握の重要な鍵概念(能動性と受動性)を明らかにした。これによって,ASBJ と IASB のリスク志向性を把握する基礎を得た。また,かかる具体的な概念の析出によって,今後のモデル構築において利用可能な操作的な概念への転換の基礎も得た。

(2) 2年目には,1年目の研究で解明した FASB のリスク志向性の鍵概念としての能動性と受動性について概念的な深化を行った。同時に,ASBJ や IASB のリスク志向性の把握に

あたっては、これら能動性と受動性という概念が当てはまらないとの示唆を得た。これらによって、各会計基準設定主体のリスク志向性の理解にあたっての手掛かりを獲得した。

(3)3年目には、FASBのリスク志向性が会計基準に及ぼす影響を探るために、主として、SFAS143とSFAS146における会計処理方法の比較検討を行い、その統合を行った。これらの結果、次の3つの成果を得た。第1に、SFAS143とSFAS146の相違は、もっぱら対象とする債務・負債の解消までに見込まれる期間の長短に応じていることを明らかにしたことである。第2に、SFAS143が借方相手勘定を資産とすることによって(資産負債の両建処理)期間損益計算への影響を与えずに貸借対照表の情報力を向上させるという今日の情報需要に応えた新しい会計方法になっているのに対して、SFAS146では借方相手勘定を期間費用とすることによって、実質的に未払金の会計と同種の伝統的な会計処理が採用されていることを明らかにしたことである。第3に、SFAS143とSFAS146の相違はもっぱら貸借対照表における表示の観点に基づくものでしかなく、その基盤としての会計処理は同構造のものであり、SFAS143型として一括りになることができるものであることを明らかにしたことである。

(4)4年目には、資産除去債務およびリストラクチャリングに関する会計基準を題材とした分析を行い、以下のことを明らかにした。ASBJとFASBのリスク志向性はリスク回避的である。ASBJとFASBにおける会計基準の規定する会計処理では会計数値の変動性の回避が意識されている。このため、会計数値の確定性が高まり、また、伝統的な利害調整機能に要求される会計数値の硬度を高めることに結び付いている。ASBJとFASBにおける保守的志向性が、今日に至ってなお会計基準に固着しているものと解釈される。他方、IASBはリスク中立に近い。その時点で最も有用(あるいはレリバント)な会計情報の作成を最大の考慮事項としており、会計数値の確定性には拘泥していない。この意味で、情報の価値の最大化という視点では、IASBの会計基準がASBJとFASBの会計基準よりも高品質の会計情報の生成に結びつくことと理解できる一方、実務で培われた利害調整機能の面も含めれば必ずしも高品質とは言えないとの理解も可能である。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計 6件)

- [1] Kubo, Junji and Jun Hiyama, "Reasonable Estimation of the Amount of Loss in ASC450-20, "Loss Contingencies"," 『経済学研究』第69巻第1号, 2019年6月, 査読無し。
- [2] 久保淳司「SFAS143の確立 - FIN47の設定過程を通じた検討 - 」『経済学研究』第66巻第2号, 49-66ページ, 2016年12月, 査読無し。
- [3] 久保淳司「将来支出に係る2つの会計処理方法 - SFAS5型とSFAS143型の対象の明確化 - 」『会計プロGRESS』第17号, 70-83ページ, 2016年9月, 査読あり。
- [4] 久保淳司「FASB概念フレームワークプロジェクトフェーズBにおける不確実性の取り扱いに関する審議内容の整理」『経済学研究』第66巻第1号, 33-57ページ, 2016年6月, 査読無し。
- [5] 久保淳司「FASB公開草案『長期資産の減損または処分に関する会計および処分活動に関連する債務に関する会計』の内容および外部者の評価」『経済学研究』第65巻第1号, 184-199ページ, 2015年6月, 査読無し。
- [6] 久保淳司「リストラクチャリング負債会計基準の確立 - SFAS143型としてのSFAS146」

『経済学研究』第 65 巻第 1 号, 33-65 ページ, 2015 年 6 月, 査読無し。

〔学会発表〕(計 2 件)

- [1] 久保淳司「アメリカ偶発事象会計基準の確立過程」日本会計史学会第 35 回大会(北海道学園大学) 2016 年 9 月。
- [2] 久保淳司「将来支出に対する 2 つの会計処理方法」日本会計研究学会第 74 回大会(神戸大学) 2015 年 9 月。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

○取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 なし

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: なし

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名: なし

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。